

## <エッセイ>日文研：ギリシャと日本

著者	カラリ＝ヤナコプー ル イウリア（リリアン）
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	39-41
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006684">http://doi.org/10.15055/00006684</a>

## 日文研―ギリシャと日本

イウリア（リリアン）・カラリィヤナコプー

私はギリシャに生まれアテネ大学哲学部考古・美術史学科を卒業後、ギリシャ政府奨学金を得てソルボンヌ大学に留学した。パリでは六年もの月日を過ごし、今ではフランスは私の第二の故郷となっている。その頃の私は日本についてほとんど知らなかったが、船員として世界を巡っていた従兄弟から日本の話を聞き、またパリで多くの日本人学生と知り合ったこともあり、少しずつ日本への旅が私の夢となっていった。そして、ある友人の日本人学生に招待され東京でひと夏を過ごすこととなった。ヨーロッパとは異なる文明と新しい体験。その時日本は、私にとって愛すべき第三の故郷となった。

その旅の後、文部科学省の奨学金で日本へ行くという貴重な機会を得たものの、アテネ大学での就職など個人的な理由でその奨学金を辞退せざるを得なかった。これは私の人生の中で最も大きな後悔の一つとなった。そのせいか、その後も心のどこかに「日本で研究する」という夢を持ち続けていた。

その夢は日文研のおかげで叶えることができた。日文研にはたった四ヶ月しか滞在しなかったが、それは私にとって新しい学問の旅、大きな挑戦であり、結果として本当に心地よく実り多いものとなった。この滞在の目的は、先史時代のギリシャと日本の文化的側面を学び理解し比較することであったが、私の目の前にあった日本の風景はバルカン半島南部やエーゲ海の

島々とよく似た魅力あふれる新しい世界だったのだ。日本でもギリシャでも、遊牧民や居住民といった様々な人間集団が、変わり続ける自然環境のなかでなんとか生き延びようとし、新たなものを生み出そうとしていた。人々は似たような環境条件の中で生活様式の選択を余儀なくされていたのだ。多くの人々が海のそばで暮らし、あるときは水や海の恩恵に与り、またあるときは火山や地震によってその生命を脅かされてきた。その私の研究にとって大きな助けとなったのは、日文研の図書館、その効率の良い相互貸出システム、そして客員研究者のための快適なオフィスや図書スペースであった。ギリシャでは、大学や外国の研究所においても日本考古学に関する本を見つけることはほとんど不可能なのである。

滞在中、幸いにも私は安田喜憲先生、宇野隆夫先生という日本の偉大な教授に招かれ意見交換をすることができた。その他にも、栗山茂久先生、パイ・リー先生、ジル・カンパニョーロ先生といった多くの客員研究者とも友情を結ぶ機会を得た。おかげで多くの博物館や遺跡、貝塚を見学することができ、貝製装身具や特徴的な土器、日本独自の葬制に関する知識を得ることもできた。安田先生が連れて行ってくださった遺跡と仙台の博物館での経験は本当に素晴らしいものであった。

その数年後、磯前順一先生がアテネを訪問され、滞在中に日本の宗教についての講義をしてくださった。それは私の学生にとって、日本人の宗教や社会文化環境を理解するまたとない機会ともなった。

今でも、日文研でのすてきな思い出の数々をありありと思い出すことができる。私は研究所の裏にある森と、夏に咲くクチナシの花の香りが大好きだった。アパートの窓から臨む夕陽に映える京都の町並みと、午後の講義、そしてカクテルパーティーが本当に懐かしく思い起こさ

れる。

帰国後私はヨーロッパ、アフリカ、アジアの新石器時代についての本をギリシャ語で執筆したが、拙著の一章は日本の先史時代に関する日文研での研究成果である。ささやかではあるが、これは私から日文研への恩返しでもある。講義にしてわずか二時間ほどの内容だが、知る限りギリシャでは唯一の日本考古学に関するものであろう。今となっては叶わぬ夢だが、もう一度日文研を訪問し、さらなる理解を深める機会を得たいと切に思っている。

文学、歴史、考古学は過去の社会をより良く理解するための基礎として切り離せない関係にある。ギリシャや日本のような偉大な古代文明は、物的証拠を無視して語ることはできない。いつの日か、私の講義を受けた教え子の中から日本で実際に資料を検証しながら日本考古学を学ぼうとする若者が巣立ってくれることを願ってやまない。

(アテネ大学考古学科教授)

原文…英語

翻訳…細川周平 (国際日本文化研究センター教授)